小さきものと傘の中

「うるせえなあ！」
「親にむかってうるせえとはなんだ」
ドスンドスン近づいてきたと思ったら、わき腹をひっつかまれ玄関から外に放り出された。冬と春の境目のような今日は朝から小雨がしとしと降っていて、薄ら寒い。Ｔシャツ一枚の体が、急に冷やされるのがわかる。何が起こったのかわからないままきょとんとしていると、怒りで真っ赤を通り越して少し黒いぐらいの顔色になった父さんが般若面で言う。
「お前はそこで少し頭ひやせ」
重々しい音を響かせて玄関が閉まり、丁寧に鍵までかけられた。コンチクショウ。玄関を蹴ってやろうと思って足を延ばしかけたが、何もはいていないで薄い靴下一枚だということを思い出し、自分の足まで痛める必要はないだろうと引っ込めた。と、その俺の格好悪さは俺だけが知っていると思っていたのだが、すぐ傍からぷっと笑い声が聞こえた。
顔を向けると、ひょろ長い男が隣の部屋のドアの前に腰を下ろしている。鼻筋が通った、モデルみたいな男だった。今はもう見てないけど、日曜日の朝にやってた戦隊モノのレッドみたいな顔をしてる。ちょっと女っぽいけれど、格好からみて男だ。こいつも俺と一緒でＴシャツにジーンズで、靴ははいてない。靴下の足をすりあわせながらにやにや笑って俺を見てる。
「おそろいだな」
「……」
俺もバカじゃないから、変な大人とはしゃべらないことに決めている。ぷい、と横を向いてじわじわ冷える足の指を丸めながら、湿った廊下を歩いて男とは反対側の階段の近くまで行く。けれども、屋根がそこからなくなっているのでコンクリートの階段はべたべた、しかも一階からは冷たい風が吹き上がってくる。そもそも靴下だし、こんな格好じゃあここでじっとしていてもいつか死ぬ気がしてきた。どうしようか、と肩をすくめて部屋の前までもどってくる。相変わらずひょろ長い男はにやにやとこっちを見ていた。
「名前なんて一の？」
「……」
「怪しくない、俺怪しくないって、あはは。まああやしいか…」
いよいよ気味が悪くなった俺は、玄関に対して横向きに座って男に顔を見せないようにした。膝をかかえる。半ズボンから出る自分の膝小僧が寒さか乾燥か、白くカサカサでなんだかかわいそうだ。ふと、甘いにおいがしてそれは男がこっちを覗き込んでいたからで、彼の真っ白い頬には一つだけ赤く膨れたにきびがあった。うわ、と叫んで身をのけぞらせたのだが、そのままひっくり返ってしまって頭を軽く打った。じーんとした痛みが、寒さで余計に助長されているようだ。仰向けになっている俺の顔をのぞきこんで、男は笑う。
起き上がってもう一度座りなおすと、彼は俺の横にぴったりとくっついた。甘いにおいは女みたいだ。母さんはこんなにおいしなかった、と思う。
「名前なんて一の」
「……」
「俺アキラ。２４歳です」

「……祥吾。１１歳」
「へえ、じゃあ小学５年？」
「…四月から」
「…ん？早生まれ？」
彼は――アキラはまあいいけど、と本当にどうでもよさそうに呟いた。昼過ぎ、まだ日が暮れるには早い時間帯なのに、空は濃い灰色で雨はしとしと降り続いている。恐る恐る吐き出す息は、真冬ほどではないがほんのりと白く色づく。二人してほお、と息を吐いていたのがおかしくて思わず笑った。のを、見られていた。
「あ、祥吾わらったー」
「……うっせー」
「……何、お前さ、父ちゃんとケンカでもしたの」
「……別に」
「別にじゃねえだろー。兄ちゃん見てたぞ。親はさ、大事にしなきゃダメだぞ、な」
「なんで兄ちゃんがそんなこと言うんだよ」
「ん、まー……年上のイゲンかな」
「イゲン？」
「そ、イゲン」
彼が肩にもたれてくる。甘いにおいが強くなった。なんだか恥ずかしくて顔を背けるが、アキラは気にしないようでその薄いからだをこちらに預けていた。押し返そうにもどうにもできない。俺は黙って、雨のにおいを意識するようにした。しとしと、雨はまだ止まない。
どれぐらい時間が立っただろう、空の色がだんだんと青みを帯びてきていつのまにか雲が薄くなっていた。雨のにおいがどんどん控えめになり、反対に意識しないようにしてもアキラの甘い香りがにおい立つ。げほん、と大人みたいにせきばらいをしてみたが、特に効果はないようだった。
「アキラ」
隣の部屋の玄関が唐突に開いて、俺も彼も顔をそちらに向けた。顔一つ分だけ開いたドアから、メガネをかけたちょっと嫌な感じの男が顔を出している。爬虫類って呼ばれてる、理科のセンセイに似てる。メガネ男は俺の方に一回視線をくれたけど、特に何も言わないでアキラをずっと見てる。
俺にもたれていたアキラは立ち上がり、ひょろひょろとドアの方に行く。俺のことは一度も見なかった。二人は顔を近すぎるほど近づけて、何か話している。メガネがアキラの頭をなで、アキラがごめん、とつぶやいたのが聞こえた。そうして中に入ろうとして、アキラは俺の方を振り返り、ばいばい、と小さく手を振った。玄関が閉まる。
「祥吾」
俺の家の玄関もあく。さっき顔が赤黒かった父さんは普通の肌色にもどっていて、逆ハの字になっていた眉毛は今度は頼りないハの字。俺もすっかり冷えた体には、さっき玄関を蹴ろうとしていた力はどこにもなくて、しょんぼりとする。部屋に入ると父さんがでかい手で俺の頭をぽん

ぽん、と撫でた。
「悪かったな。父さん、頭に血が上ってた」
「いや、俺も。ごめんなさい」
「うん、さ、お祝いのご飯作らないとな。買い物行くか。体調は？」
「大丈夫だよ。上着とってくる。もう少ししたら雨止むみたいだし」
「そうか」
父さんは、俺の頭においたままの手でこんどはゆっくり撫でてくれた。ちょっと涙が出そうになって、アキラが「大切にしろ」といった言葉を思い出す。わかってる、と、小さくつぶやいた。

母さんが死んだのは、一年ぐらい前。俺を車に乗せてスイミングに通う途中だった。ここから二駅ぐらい離れたところのマンションに住んでて、そこからスイミングまでは車で二十分もかからないところにあったのに。
今日みたいなしずかに雨が降ってた日だったと思う。
そこから記憶は途切れて、気づいたら包帯ぐるぐる巻きでベッドの上だった。父さんが隣で泣いていて、何も聞いていなかったけれど母さんが死んだことを、俺はそのときに知った。病室は真っ白で、天井を眺めていたらすぐに眠くなって俺はまたすぐに眠りについた。
それからリハビリをして、起き上がれるようになって車椅子での移動も可能になったころから院内学級に通っていたけれど中々勉強もすすまない。父さんは母さんのことはやっぱり何もいってくれなかったけれど、アンモクのリョウカイになってた。たまに父さんのほうのばあちゃんも母さんのほうのばあちゃんもきて（じいちゃんは俺が小さいときにどっちも死んでる）、リンゴをむいてくれたり本を買ってきてくれたりした。たまに二人が顔を合わせるときがあって、ちょっと泣いてるみたいだったけど、俺はそういうときは窓を見た。きまってなぜか、雨が降ってた。
この間やっと退院したけれど、父さんは気を使ってか俺の入院中に引っ越していて今のとこに住み始めた。本当は六年になるはずが、また五年からやり直しだと聞いて思わず駄々をこねてしまった。そんで放り出された。 もともと友達もいなかったし、入院中だって先生が少し顔を出してくれるぐらいで学校のやつなんかこなかったし、たぶんどこにいたって俺は友達も上手くつくれないんだと思う。でもやっぱり学校を変わってしまうのがいやだった。 別にもう、いいけど。

そして四月になり、俺は新しい学校に通い始めた。そしてたまにアキラにあった。
時間帯はばらばらだったけど、アキラは相変わらずひょろ長くて、大抵へらへら笑って隣の部屋の玄関の前につったてたりしゃがんでたりした。いつもＴシャツにジーンズで靴下一枚だった。
時間があるときは、いつもアキラといろんなことを話した。といっても、アキラが一方的に自分のことを話すので、俺はふんふん、と頷くか笑うか。 アキラはフリーターで、四つ年下の弟がいて、でも家族とは一緒に住んでなくて、今すごい好きな人がいるんだっていう。
俺の予想によると、たぶん、アキラはホモってやつでつまり俺たちとは違って男が好きで、で、あの爬虫類に似てるめがね男がアキラの好きな人。 そういう話を、直接聞いたことはない。だからって、別にアキラのことを嫌いになるってわけじゃないし。
「お前、好きな子とかいないの？」
「いない」
「じゃあオナニーとかしたことないの？」
「オナ……？」
「はは、人前で絶対言うなよ……好きな子いないのかよ。まあこれからかなあ。人を好きになるのっていいことだよ」「わかんない」
「あはは、まあ、」
「年上のイゲン？」

「そーそー」
アキラは笑った。俺も、ちょっと笑った。

「おかえり」
六月にはいって、すぐに梅雨入り宣言が出された日のこと。もちろんその日も雨で、けっこうな量が朝から降り続いていた。
階段を上っていき、土砂降りのせいで少しよれよれになってしまった傘をたたむと同時に、アキラが視界に入った。でもいつもとは違うっていうことがすぐわかった。傘ももっていないで、びしょ濡れだったからだ。さすがに汗であんなにべたべたになったりはしないだろうし。
「た、だいま……傘もってないの」
「あ、はは……ちょっと飛び出してきちゃった」
「飛び出すって……俺ずっと思ってたけど、アキラってけっこうバカだな」
「うるせ、ガキ」
アキラはいつもと一緒で笑ったけど、今にも泣きそうになってる。俺はなんかすごく悪いことをしてしまったようで、いそいそと部屋に入ろうとする。けど、ポケットから鍵をすぐに取り出せない。えーと、と、アキラを見ないようにしていると、ランドセルに変な重みを感じて振り向いた。アキラが濡れたランドセルと、彼のシャツの裾でふいてくれていた。甘いにおいはしない。
「あ、ありがとう」
「いや……怒られないの、父さんとかに。ランドセルって濡れたままにしておくとだめって、さあ」
「あんまり……」
「俺いつも、怒られたりしてたよ。これからはちゃんとふけよ？」
「うん……」
鍵を取り出してドアを開ける、けれど、なんだか中に入りにくい。そっと見ると、彼はまた隣の部屋の玄関の前に立って、チャイムを一回押している。ピンポン、と音はするけど中から誰かが出てくるようには見えない。もう一度、押す。でもやっぱり出てこない。どうしようか考えて、口を開いた。
「うち、くる？」
「え？」
アキラが驚いたようにこちらを見た。
「いや……父さん今いないし、べつにきてもいいけど……濡れてるし……」
「やさしいなあ、祥吾は。でも、大丈夫だよ。ありがとな」
「うん」
部屋に引っ込んだ。 すぐにランドセルをタオルで拭いた。雨が強くなったのか、窓の外から低いうなり声みたいな音が響いてくる。

ご飯と味噌汁をつくった時点で、電話が鳴った。
「もしもし」
『祥吾か？父さんだけど』
「うん、今ちょうどご飯と味噌汁できたとこだけど」
『ああ、そうか、ありがとう。悪いけどちょっと駅まで迎えにきてくれないか』
「ええ？」
『いや、早く終わったのはいいんだけどさっき傘が壊れちゃってな…この間新しく買った傘があったろ？持って来て欲しいんだ。まあ雨降ってるけど明るいし、大丈夫だろ』
「うん、わかった。すぐ行くよ」
『頼むよ』
「あ、父さん」
『うん？』
なんで自分でも思い出したのかはわからないけれど、思わず聞いていた。
「隣の人なんだけど」
『隣の人？』
「うん、206号室の人、知ってる？」
『ああ、若い人だっけ。そういえば引っ越したよなあ？』
「引っ越した？」
『いつだったかな、父さんもちゃんと知らないけど、ちょっと前に』
「そっか」
『それがどうかしたのか？』
「ううん、その人の知り合いが聞いてきたから」
『変な人じゃないだろうな』
「大丈夫」
じゃあ、と電話を切った。直接あのメガネ男のことも、アキラのことも、どんな関係なのかもしらないのに心臓がドキドキする。知ってはいけないことを知ってしまった気分。
深呼吸を二回して、この間母さんの命日に買い物をしたときに買った、父さんの新しい傘と、俺の傘をもって玄関を出た。 と、アキラがまだいる。心臓が跳ね上がる。
さっきからどれだけ時間がたってるのか、驚きすぎて算数が嫌いなわけじゃないのにすぐ計算ができなかった。彼はぺったりと座り込み、出てきた俺を見ても悲しげに眉間にしわを寄せるだけで、何も言わなかった。雨は俺が帰ってきたときよりもひどくなっていて、屋根のある廊下までも、ふり込んできていた。きっと彼の足元もずいぶん濡れているはずだ。風邪引かないのか。うすらぐらい中で、しょんぼりと座っているアキラはちょっと気味が悪い。
「まだいたの」
「うん……」
「……いないんじゃないの、その人」
「帰ってくるかもしれないし……」

「……引越したって、言ってたよ……だからいなーー」
言いかけた瞬間、彼は立ち上がって俺の口をふさいだ。なぜかふやけた手が俺の顔半分を覆っている。父さんと同じぐらいの手だけど、父さんみたいに温かくなくてつめたい。アキラは泣きそうな顔をして歯を食いしばってた。
しばらくそうしていたアキラは、ゆっくり俺の顔から手を離すとその場にかがんで膝に顔をうずめてしまった。そのまま放っておくのもなんだか気が引ける。どうしようかずっと考えながら、でもどうしようもない。
ふいに、アキラが顔をあげた。目が兎みたいに真っ赤になってて涙が盛り上がってる。 じっと見つめていたらアキラがわんわん泣き出して、それはまるで小さい男の子みたいで俺はどうしようもなくて、ふりこんでくる雨の粒をじっと見ていた。ばあちゃんたちが泣いてたときみたいに、そっと。
父さんを迎えにいかなきゃいかない。 さっきの秘密を言わなきゃよかったのかな。
俺は立ち上がり、父さんの傘の取手で顔をうずめているアキラの頭をつんつんした。 しめっている髪の毛はでろんと垂れていて、いつもより長く見える。それか、初めてあったときよりも彼の髪の毛が伸びていたのか、わからないけれど。
「これ、使って良いよ。父さんのだけど」
「いいよ、使えない」
びしっと断られた。何をいっても聞いてもらえないっていうのがなんとなくわかった。
「……俺、もう行くけどここに傘おいておくからつかってよ」
とりあえず言う。でもアキラは答えないで、膝に顔をうずめたまま。俺は自分の傘だけもって階段を下りた。
駅に着くと、改札の外に父さんがいて俺を見つけると手を振ったんだけど、俺が傘を持っていないことに気づいて怪訝そうにしていた。
「あれ、お前、父さんの傘は？」
「あ、ごめん、忘れてきちゃって」
「バカだなあ。意味ないだろう」
仕事がいつもよりは早く終わったことに上機嫌だったみたいで、俺の小さい傘で二人して入った。といっても、父さんは俺の方に傘を傾けるので、ワイシャツの左肩がびっしょり濡れて透けていたけれど、それでも満足そうにしていた。寄り添って歩くから、ちょっと暑い。鼻の頭に汗をかいていたら、父さんが気づいたみたいでコンビニによって、アイスを二つ買った。
嘘をついてごめん、と思いながら、アパートに向う。雨の勢いはまだ衰えない。
明日も雨かなあ、と父さんが言う。街灯が雨のせいか、ぱしぱしと気味悪く音を立てる。
階段を上り、父さんの傘が玄関のノブにかけてあるのに気づいた。アキラがずっと座っていたところだけが乾いていて、その場所をぼんやりと廊下の電気が照らしていた。
「こんなとこに傘、かかってる。あわてて家出てきたのか」
父さんは傘をとり、俺に渡してきた。頷いて受け取る。俺は、隣の部屋の前の、乾いた部分をじっと見つめた。

「二年経って、俺は中学生になった。同じ小学校の奴らも多い、地元のなんの変哲もない中学校だ。相変わらず俺に友達はできない。たぶん、同い年にしては頭ひとつ分抜き出てしまうこの身長のせいだったり、無愛想な顔つきのせいかもしれない。たぶん、みんな俺が本当は一つ年上だということに気を遣っているらしいことは、小学校の頃から知っていた。自分から言わなくたって、そういうのはいつのまにか知れ渡ってたりする。

期末テストが始まった日が大雨になった。みんな誰かの傘にいれてもらったり嬉しげに濡れながら笑って帰っていく。俺は教室で雨が止まないか待っていたが、その見込みもなさそうなのでゆっくり立ち上がって湿った廊下を歩く。
薄暗い昇降口には誰も居らず、俺が下駄箱から下靴を出してざら板に放る音が響く。あいかわらず土砂降り。傘立てを見回したが、ささっているのは支柱がひんまがっているか取っ手がなくなっているようなボロ傘だった。濡れて帰るか、とため息をつく。
昇降口を出ても少し屋根がある。そこからびしゃびしゃになっているグラウンドを見つめた。校門までは真っ直ぐグラウンドを突っ切るしかない。いやな気分で踏み出そうしたその時だった。
「ほら」
斜め後ろから傘が差し出された。大人用の、黒い傘。振り返ると、まだ若い男の先生が傘を差し出していた。俺はその顔をなんとなく知っている。いや、確実に知っている。
「祥吾」
彼は俺の名を、少しにやにやと笑いながら呼んだ。かすかにする、女みたいなにおい。懐かしいにおいだ。
「……上月先生」
「兄ちゃんってさすがに呼ばないか」
「呼ぶかよ」
先生――アキラは、そっかあと言って笑った。それも懐かしい笑い方だった。

入学式で学校の先生が一人ひとり紹介される中、俺はいち早くその顔を思いだした。 アキラがいる。なんで先生に？なんでここに？一気に問いただしたい気にもなったが、反対に関わるのも悪い気がしてできるだけ話さないようにしていた。
幸いなことに彼は一年生の担当ではなかったので、学校内でも会うことは稀で向こうも俺に気づいているのかいないのかわからなかったので、今日まで接触もなくこれた。
「傘、使っていいよ」
「……いいよ、別に。走って帰ったらすぐだし」
「まあまあ。ほら、あんときさ、あんときって覚えてる？」
「あれだろ、先生がずぶぬれになってうちきた日」
「うんそう、あんときお前の優しさを大人のくせに無碍にしちゃったからねえ」
「ムゲ？」
「そ。あ、まだ子どもにはわかんないか」

「先生に威厳がないのはわかってる」
「うるせえな」
彼は傘を開き、なお、俺の方に差し出してくる。たぶん断ってもしまわないだろうと思って受け取った。アキラは満足げに頷く。
「……お前さ、俺のこと学校はいってからさけてたろ」
「……」
「わかるんだよ、クソガキ」
頭をぐしゃぐしゃとわしづかみにされた。やめろ、と少し笑うと彼も嬉しげに笑った。
「あーあ、俺もだめだな。お前みたいなクソガキに気を遣われたら。別にいいんだぞ、俺がホモだってばらしても」「ガキくさいことしないよ」
「ガキのくせに」
一歩歩き出す。水溜りだらけのグラウンドが、俺の靴の下でぐちゃりと音を立てた。振り向くとアキラは昇降口のところに立ったまま、こちらを見ていた。きょろきょろとあたりを見回すようにして、誰もいないことを確認すると俺のところまで小走りでやってくる。少し濡れた彼は、傘にむりやりはいってきた。
「何してんの」
「いや。あのさ、お前友達いないって言うじゃん。そんで、お前の家のこととか、まあ俺は知ってるんだけど」「…そういうのショッケンランヨーって言うんでしょ」
「うるせえな。先生は子どものことが心配なの。お前さ、けっこう一人でいるだろ。なんかあったら俺に言えよ？」
「言ったってしょうがないし」
「ばか。しょうがなくないんだよ。そういうとこがガキなの」
アキラの手が俺の肩にのる。温かい。
「お前な、甘えるときは甘えろよ。それにな、そんなさ一年なんか大人になると意味ないし全然関係ないんだからさ、友達作れよ。俺なんか先生になるのに二年はかかってんだから。突っ張ったっていいことなんか何もないよ」
アキラはぽんぽん、と俺の肩を叩く。
「先生……俺が引っ越したっていってなかったら……あんな泣かないでよかったよな」
本当はずっと気になってた。俺はいつも帰ってくるたびに雨が降るたびに、アキラが来るんじゃないかって、もしきたら「引っ越した」ってことを言ったことを謝ろうって。俺が言うことじゃなかったのかもしれないって、そのせいでアキラが傷ついて泣いたんじゃないかって、ずっと、思ってた。
アキラは俺から傘をうけとって、もう片方の手で俺の頭をゆっくり撫でてくれていた。彼の手はあたたかくてやさしい。
「ばか。あれはお前のせいじゃないよ。あいつと付き合ってたことは、まあ、なんだ、ちょっと間違えたっていうか、大人でも間違えることがあるっていうか、もう少し大人になったら話してやる。お前はちゃんとした人、好きになれよ」

「わからん。そのうちわかるよ。じゃあ、気をつけてな」
ぐちゃぐちゃ言うグラウンドを歩く。土砂降りが勢いを増す。湿度もあがる。でも、不思議と気分は悪くない。
「祥吾」
振り返る。
「まだ、あのアパートにすんでんの？」
「うん……兄ちゃん」
そう呼ぶと彼は少し驚いたようだったが、何、と顔で問い返してくる。
「今度は、家よってってもいいよ」
「かんがえとく」
アキラは笑って手を振っている。俺は軽く頭を下げて、傘の取っ手をしっかりにぎると歩き出した。

ＥＮＤ